

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民博通信 Online no.1; 表紙,目次ほか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009488

みんぱく
つうしん
オンライン

民博通信

No.1
2020

— online —



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

民博通信

— online —

No.1
2020

『民博通信』のオンライン化にあたって

『民博通信』は、1977年10月に創刊され、年に4回刊行されて、2019年3月の164号まで読者の皆様のお手元にお届けしてまいりました。このたび、この『民博通信』をオンライン化し、『民博通信 Online』として新たな形態で発信することとなりました。

創刊から40年以上の年月がたち、みんなくをとりまく、学術研究の環境も、また情報環境も大きく変化してきています。学術研究と社会との関係が改めて問い直され、研究機関が学術情報を限られた社会に対して一方的に発信するだけでなく、学術研究そのものを社会との協働のもとで進めることが前提とされるようになってきています。「研究連絡メディア」としての『民博通信』にも、文化人類学・民族学の研究者コミュニティを対象とするだけでなく、より広い読者のあいだで「共有」されることが要請されてきています。

こうした状況に鑑み、研究の最新情報を機動的に、しかも潜在的な読者も含めた多くの方々とも共有することを目的に、今回、『民博通信』をオンライン化いたしました。当面は、年2回の発信を予定しています。『民博通信 Online』は、みんなくのホームページで随時ご覧いただけるほか、ダウンロードもしていただけます。また、みんなくの SNS (social networking service) などにて刊行の情報をいち早くお知らせいたします。

この場をお借りしまして、これまで『民博通信』に親しんでいた多くの読者の方々に心より感謝申し上げますとともに、新たな形態の『民博通信 Online』へのご支援とご協力をお願いいたします。

国立民族学博物館長

吉田 憲司

『民博通信 Online』について

国立民族学博物館は、文化人類学や民族学研究のセンターとして、世界の諸民族の社会や文化の研究を進めるとともに、その成果を出版などのかたちで発信しています。

現在、本館では、人間文化の新たな価値体系の創出を目指す「基幹研究プロジェクト」、現代の人類社会が直面する課題の分析を目的とする「特別研究」、特定のテーマについて館内外の研究者と一緒に研究を進める「共同研究」などをおこなっています。また、若手研究者を海外に派遣し、研究動向を把握する「海外研究動向調査」も実施しています。

『民博通信 Online』は、本館において実施している個々の研究プロジェクトについて、その学術的な特色や独創的な点、導きだされた成果などを、研究者や一般の方々にはわかりやすく発信する雑誌です。

表紙写真

インドネシアのティモール島での機織り。バリに拠点を置くフェアトレード団体から支給された天然染・手紡ぎ綿糸で注文の品を織っている。織り仲間のなかには色鮮やかな化学染の糸を機にかけている人も（本誌8-9頁）

CONTENTS

| Start up

共同研究 オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	
真実と虚偽の狭間に措定された「史実性」の追究	
風間計博	4
共同研究 カネとチカラの民族誌 —— 公共性の生態学に向けて	
なぜ公共空間の生態学なのか	
—— 「潜在的なもの」に目を凝らし、耳を澄ますために	
内藤直樹	6
共同研究 伝統染織品の生産と消費 —— 文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	
伝統染織とは何か —— 伝統と革新、そして継承	
中谷文美	8
共同研究 心配と係り合いについての人類学的探求	
ケアの生態学に向けて	
西真如	10
共同研究 グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス	
ナラティブ・ポリティクスとしての現代異人論の探求	
山泰幸	12
共同研究 拡張された場における映像実験プロジェクト	
映像表現をめぐる考察 —— 現場の視点から	
藤田瑞穂	14
共同研究 グローバル化時代における「観光化／脱-観光化」のダイナミズムに関する研究	
観光を再考する、観光の人類学を再構想する	
東賢太郎	16
共同研究 島世界における葬送の人類学 —— 東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	
サピエンスによる葬送行為を島という視点から探る	
小野林太郎	18
共同研究 社会・文化人類学における中国研究の理論的定位置 —— 12のテーマをめぐる再検討と再評価	
なぜいま中国の人類学的研究を再考するのか	
河合洋尚	20
共同研究 人類史における移動概念の再構築 —— 「自由」と「不自由」の相克に注目して	
異分野融合による人類史規模での移動概念を求めて	
鈴木英明	22

共同研究 食生活から考える持続可能な社会 —— 「主食」の形成と展開	
共同研究「主食論」をはじめめるにあたって	
野林厚志	24
共同研究 沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	
再生事業の現場から問い直す泉靖一のイオル	
大西秀之	26
共同研究 感性と制度のつながり —— 芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	
感性と制度の多様な結びつきを探究する	
緒方しらべ	28
共同研究 モビリティと物質性の人類学	
移動の物質的側面を追って	
古川不可知	30

| 海外研究動向

民族植物学コレクションを活用した共同研究の動向	
—— キュー植物園エコノミック・ボタニー・コレクション	
大澤由実	32
イギリスにおける民族音楽学の研究動向	
—— 学際的共同研究の取り組みを中心に	
神野知恵	34
オランダにおける資料管理等に関する研究動向調査報告	
末森薫	36
英国のセミナー文化に見る人類学的な知のありかた	
古川不可知	38
新刊の紹介	40
国立民族学博物館の研究	44

新刊の紹介

本館では、館外での出版物を奨励する制度があります。★の印は、その制度を利用して刊行された出版物です。タイトルをクリックすると詳細情報に移動します。



ケアが生まれる場

—他者ととともに生きる社会のために

★

森 明子 編

定価：本体3,800円＋税 328頁 ナカニシヤ出版 2019年4月26日刊行

ケアはどのような状況で生まれ、そこではどのような関係性があらわれているのだろうか。本書は、家族と社会の境界面の編成という視座からケアをとらえて、その実践を描き出す民族誌研究である。ケアは、国家がゆらぎ、社会の編成のあり方が大きく変容する世界において、国家と地域、宗教と世俗の境界を越えて、発動し、新たな関係性を創りだす。世界のさまざまなフィールドの15の物語を通して、ケアが生まれる場であられつつあるものについて考察する。



宗教と開発の人類学

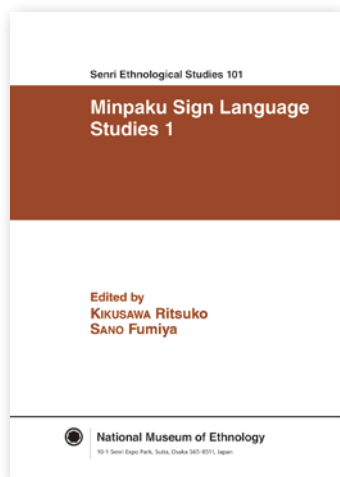
—グローバル化するポスト世俗主義と開発言説

★

石森 大知・丹羽 典生 編

定価：本体4,000円＋税 448頁 春風社 2019年6月3日刊行

教育・医療・福祉の各分野から社会全体の変革まで、宗教団体や宗教者による開発への関与が顕在化する現代。宗教は人びとを結びつけ、他方で引き離す。開発の現場で宗教の教義や理念はどのように活かされ、またどのように受容されているのか。その活動は世俗組織による活動とは何が違うのか、あるいはそこに公共性はみられるのか。歴史的・社会的・宗教的背景が異なる多様なフィールドの知見を踏まえながら、本書は、アジアとオセアニアにおける開発の現場から、宗教と開発の関係を問い直し、現代社会における宗教の意義を考えるものである。



Minpaku Sign Language Studies 1 Senri Ethnological Studies (SES) No.101

KIKUSAWA Ritsuko and SANO Fumiya (eds.)

190頁 2019年6月21日刊行

シリーズ刊行（予定）の第1巻目である本書には、2016年に国立民族学博物館で開催された“The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics”で発表された研究を中心に、外部の査読を経た質の高い手話言語学の研究論文が計10本掲載されている。

手話言語学は、その研究成果を報告する場が限られており、とくにアジアの手話に関する研究報告は少ない。本書には、日本手話や台湾手話、中国手話、韓国手話、アメリカ英語などさまざまな地域の手話にかんする研究論文が掲載されており、手話研究者必読の書となっている。

世界の捕鯨文化—現状・歴史・地域性

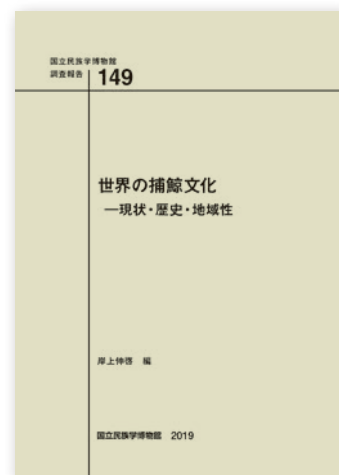
国立民族学博物館調査報告

Senri Ethnological Reports(SER) No.149

岸上 伸啓 編

216頁 2019年6月24日刊行

本書は、世界の捕鯨文化の歴史と現状、地域性に関する最新の研究成果である。世界の捕鯨の歴史と現状に関する全体像と最近の研究史を提示した後、アイスランドのナガスクジラとミンククジラの捕鯨の現状、ノルウェーの鯨食文化と捕鯨の歴史、北アメリカ極北地域の先住民捕鯨の現状と問題点、グリーンランド社会におけるクジラの経済的・社会的・文化的位置づけ、日本の小型捕鯨業の歴史と現状、デンマーク領フェロー諸島の小型沿岸捕鯨、EUの捕鯨政策、韓国とベトナムの鯨神信仰について報告し、検討している。



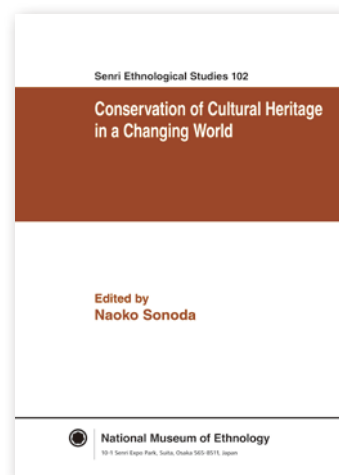
Conservation of Cultural Heritage in a Changing World

Senri Ethnological Studies(SES) No.102

Naoko Sonoda (ed.)

216頁 2019年12月9日刊行

本書は、2017年10月、国立民族学博物館で開催した学術潮流フォーラムI・国際シンポジウム「変容する世界のなかでの文化遺産の保存」(企画：人類基礎理論研究部)における発表内容を深化させたものである。過去30年間、社会は大きく変容し、文化遺産の世界も新たな変化に直面している。ここでは、(1)世界規模での環境の変化と、(2)アナログからデジタル世界への移行という媒体の変化、この2つの変化に着目し、文化遺産の保存と活用の両面から考察をすすめた。





驚異と怪異

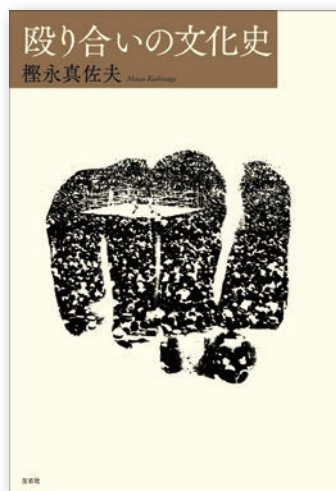
—想像界の生きものたち

山中 由里子 編

定価：本体2,700円+税 240頁 河出書房新社 2019年8月29日刊行

本書は、特別展「驚異と怪異—想像界の生きものたち」の図録である。この世のキワにいるかもしれない、不思議なクリーチャーたちを、世界の人びとがどのように想像し、形にしてきたのか、通文化的に比較することができる。一部の資料についてはコラムで、より詳細な文化的な背景も紹介した。ほとんどの解説とキャプションが和英2か国語で読める。

大道雪代氏が撮影した美しい資料写真と、佐藤大介氏によるシャープな装丁・レイアウトのおかげもあり、会期中にすでに4刷りに到達している。



殴り合いの文化史

檜永 真佐夫 編

定価：本体3,700円+税 424頁 左右社 2019年4月30日刊行

拳で人を殴るのは、きわめて人間的な暴力である。その拳には怒りがこもっている。そんな拳の闘争から、本書は人間について考える。このことは、怒りや憎しみに対して、個人と社会がいかに向き合ってきたかを考えることにほかならない。

暴力や流血に対する感性は、歴史的に変化してきた。それを論じるにあたって、ボクシングの成立と発展を取りあげている。それはこの殴り合うスポーツと、筆者自身が長く関わってきたからでもある。古今東西のさまざまな逸話がてんこ盛りの本書を、読み物としてもお楽しみいただきたい。

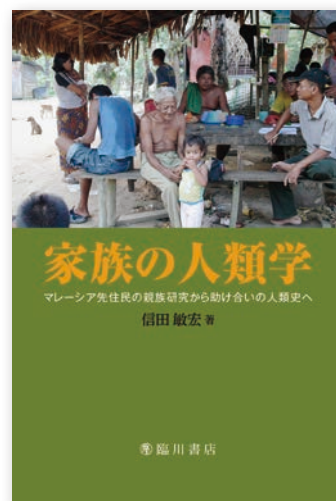
家族の人類学

—マレーシア先住民の親族研究から助け合いの人類史へ

信田 敏宏 著

定価：本体2,800円+税 264頁 臨川書店 2019年7月31日刊行

本書は、人類にとって家族とは何か、親族とは何かを問う試論的研究書である。本書では、マレーシアの先住民オラン・アスリの歴史を紐解きながら、調査村の親族システムの起源ならびにその変遷を詳述する。そして、具体的な家族の事例を紹介しながら、双系制と母系制が混在する現在の村の親族システムを解析する。さらに、NGOを介した家族・親族を超える新たな関係性について考察を試み、結論部では、人類史の観点から、家族・親族による助け合い、分かち合いの意味を問う。巻末に、村の全63世帯の系譜図や家族のエピソードを記した「世帯の記録」を付している。



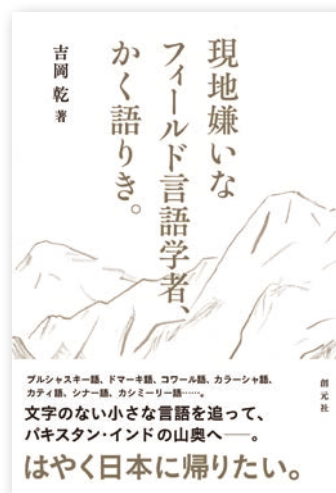
現地嫌いなフィールド言語学者、かく語りき。

吉岡 乾 著

定価：本体1,800円+税 304頁 創元社 2019年8月27日刊行

研究者はみんな、研究が好き。フィールド研究者は誰もが、フィールドが好き。そんな誤解をされてしまっは困ってしまう。世に溢れる研究者による一般書が、「研究楽しい!」「現地調査大好き!」みたいな論調に偏っているからいけないのだ。多様性の大切さが説かれ始めている昨今の世の中、フィールドが嫌いなフィールド研究者が居てもいいじゃないか。出発前から、早く日本に帰りたいのだ。

そういう気持ちで心情を吐露しつつ、ついでに言語学や言語を紹介する、全篇書き下ろしエッセイ集。



東アジア海域から眺望する世界史

—ネットワークと海域

鈴木 英明 編

定価：本体3,800円+税 324頁 明石書店 2019年10月10日刊行

本書は、歴史学の分野で近年、注目が集められてきた海域史に関して、とくに東アジア海域を対象とする論文を集めた論集である。インドネシア沖沈船、中国のムスリムのアイデンティティ、南インドに残る鄭和の記憶、太平洋を跨ぐ水銀貿易などの魅力的な各章とともに、海域という概念について批判的な検討を踏まえ、理論をより精緻化することで、海域史研究と世界史／グローバルヒストリー研究の接合から新たな地平を築こうとするものである。



■ 基幹研究プロジェクト

	プロジェクト名	研究代表者	研究期間（年度）
機関拠点型プロジェクト／人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築			
開発型	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 — 東南アジア資料を中心に	小野林太郎	2019–2021
	中央・北アジアの物質文化に関する研究 — 民博収蔵の標本資料を中心に	寺村 裕史	2018–2021
	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田 卓	2017–2020
	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	齋藤 玲子	2016–2019
強化型	ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築 — 20世紀前半収集資料を中心として	林 勲男	2019–2020
	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	日高 真吾	2019–2020
	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築 — オセアニア資料を中心に	丹羽 典生	2018–2019
	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	南 真木人	2018–2019
	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	八木百合子	2018–2019
	朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	太田 心平	2017–2019
広領域連携型プロジェクト			
	文明社会における食の布置（「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット）	野林 厚志	2016–2021
	日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築（「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット）	日高 真吾	2016–2021
ネットワーク型プロジェクト			
	北東アジア地域研究	池谷 和信	2016–2021
	現代中東地域研究	西尾 哲夫	2016–2021
	南アジア地域研究	三尾 稔	2016–2021

■ 特別研究

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	飯田 卓	2019–2021
パフォーマンス・アーツと積極的共生	寺田 吉孝	2018–2020
食料生産システムの文明論	野林 厚志	2017–2019

■ 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進しています。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

■ 特別研究

「現代文明と人類と未来 — 環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施しています。この研究を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的としています。

共同研究

●は館外の代表者

	研究課題	研究代表者	研究期間（年度）	
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
	グローバル化時代における「観光化／脱・観光化」のダイナミズムに関する研究	東 賢太郎	2019-2021	●
	島世界における葬送の人類学 — 東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	2019-2021	
	社会・文化人類学における中国研究の理論的定位置 — 12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合 洋尚	2019-2021	
	人類史における移動概念の再構築 — 「自由」と「不自由」の相克に注目して	鈴木 英明	2019-2021	
	食生活から考える持続可能な社会 — 「主食」の形成と展開	野林 厚志	2019-2021	
	オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間 計博	2018-2021	●
	統治のフロンティア空間をめぐる人類学 — 国家・資本・住民の関係を考察する	佐川 徹	2018-2021	●
	カネとチカラの民族誌 — 公共性の生態学にむけて	内藤 直樹	2018-2021	●
	伝統染織品の生産と消費 — 文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷 文美	2018-2021	●
一般	心配と係り合いについての人類学的探求	西 真如	2018-2021	●
	グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス	山 泰幸	2018-2021	●
	ネオリベラリズムの中のモラルティ	田沼 幸子	2017-2020	●
	人類学／民俗学の学知と国民国家の関係 — 20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生 勝美	2017-2020	●
	文化人類学を自然化する	中川 敏	2017-2020	●
	現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	2016-2019	●
	捕鯨と環境倫理	岸上 伸啓	2016-2019	
	音楽する身体間の相互作用を捉える — ミュージッキングの学際的研究	野澤 豊一	2016-2019	●
	グローバル化時代のサブスタンスの社会的配置に関する比較研究	松尾 瑞穂	2015-2019	
	課題2：本館の所蔵する資料に関する研究			
	沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西 秀之	2019-2021	●
	博物館における持続可能な資料管理および環境整備 — 保存科学の視点から	園田 直子	2017-2020	
	物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田 浩志	2016-2019	●
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究			
若手	感性と制度のつながり — 芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	2019-2021	●
	モビリティと物質性の人類学	古川不可知	2019-2021	
	拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田 瑞穂	2018-2020	●
	モノをとおしてみる現代の宗教的世界の諸相	八木百合子	2017-2019	
	テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田 晶子	2016-2019	●

共同研究

特定のテーマについて、館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、2～3年の期間で成果をあげる研究活動です。2019年度には、26件の共同研究プロジェクトが組織されています。

民博通信

— Online —

ISSN 0386-2836 (冊子版)
ISSN 2758-0997 (オンライン)

No.1
2020

『民博通信 Online』 No.1 (旧『民博通信』通巻165号)
2020年3月31日

編集委員

卯田 宗平 (編集長)
伊藤 敦規
宇田川 妙子
藤本 透子

編集・発行

人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話：06-6876-2151
<http://www.minpaku.ac.jp/>

制作

株式会社 遊文舎